

観音物語(9) 泥棒と遭遇する

わくち おんぞく によ かくしゅうとう か がい ねん び かのんりき げんそく き じしん
 或値怨賊繞 各執刀加害 念彼観音力 咸即起慈心

或は怨賊の繞みに値い 各 刀を執って害を加うるにも 彼の観音の力を念ずれば 咸く即ち慈心を起さん

夕暮れの尼寺に泥棒が侵入してきた。それとも知らずに、二人の尼僧は楽しそうにお喋りをしながら台所で夕飯の支度をしている。炊飯器から湯気が立ち、煮込みご飯のいい香りがする。春の味覚がいっぱいにまぶされたゼンマイとイタドリとタケノコの五目ご飯である。味噌が添えられた菜の花とフキノトウの天ぷらも小皿に盛られている。

「庵主さま、何か音がしませんか？」

「いや、別に」

「二階で音がしますよ。私、見てきます」

見習いの尼僧が二階へ上がった。

「きゃー！」

悲鳴に驚いた庵主さまはとっさに濡れた手をエプロンで拭き、ガス栓を止めて急いで二階へ駆け登った。

ベランダの窓際で中年男と尼僧が対峙している。寝室の北側にある箆の引き出しがすべて開いていて、衣類や書類が床に散らかっている。泥棒は庵主さまの寝室で物色をしていたようだ。

「欲しいものがあれば、なんでも持っていきなさい！」

突然、庵主さまの一喝が飛んだ。その声に泥棒は後ずさりした。驚いた拍子に、手にしていたナイフと紅色の財布を床に落としてしまった。財布の口がひらいて小銭がバラバラと畳一面に転がっている。

「欲しければ持っていきなさい！」

小柄な庵主さまの雷鳴に打たれて、泥棒は立ちすくんだままである。

今度は一転して穏やかに語りかけた。

「よほど生活に困っているのね。あなたには家族があり、子どももいるのでしょう。ほしいものがあつたら何でも持っていきなさいよ」

泥棒現場の恐ろしいなりゆきに尼僧の全身は硬直して目だけが動いている。ボサボサ頭の泥棒も口を開いたまま動かない。開放されたベランダ窓から逃げようとしてもしない。ナイフを拾って襲おうとしてもしない。妙な空気がしばらく支配する。「ほしいものがあつたら持っていけ」という意外なことばに泥棒は意表を突かれて躊躇しているようである。

すかさずに、庵主さまは四の句を男に問いかけた。

「ちょうど夕飯ができたから、一緒に食べない？」

男はヘナヘナと腰が崩れ、畳に坐り込んだ。上品な庵主さまから夕食を誘われ、その慈愛に心を打たれてしまったのである。泥棒は大声で泣き始めた。大粒の涙が畳にポタポタと落ちる。男は泣きに泣いた。嗚咽が止まらない。小学三年生の息子と老父母の顔が脳裏に浮かび、情けなさと、悲しさと、改心できた嬉しさが、脳裏を駆けめぐっている。男の泣き声は、窓から外へ、雲へ、空へと、遠くに伝えているように聞こえる。

泣き尽した男は、やがて顔が晴れてきた。そして、きっぱりと二人に宣言した。

「もう、泥棒は辞めます」

若い尼僧は急いで階下へ走り、茶の間に三人分の夕食を並べた。

ボサボサ頭と二つの丸坊主が一緒になって夕飯が始まった。いつもになく庵主さまは快闊にお喋りをする。

「私の前世は盗っ人だったかもしれませんよ。こうして、二回も泥棒さんに入られたのだから。因縁があるんだよね、盗っ人に、私は…。これは前世のお返しだと思いますよ。だから、あなたと一緒にご飯を食べるのよ。これ、わかる？ イタドリよ。これはゼンマイよ。フキノトウの天ぷら、味はどう？ 私が揚げたの。まだツクシは早いようだけれど、次に来るときはツクシを持っておいでよ。卵とじにするとおいしいよ」

庵主さまは五目ご飯をお変わりした。男も空の茶碗を差し出した。尼僧がご飯をよそいながら尋ねた。

「奥さんはいないの？」

「刑務所で収監されているときに離婚届けを出したよ。おっ母は何回も面会に来た。わしの育て方が悪かった、かんにんやでといつも言う。おっ母は叱らなかった…。なのに、また盗みをやってしまった。庵主さまの顔がおっ母のように見えたんだよ。かんにんやで、金輪際、もう二度と盗みません」

ボサボサ頭を両手で搔きながら、そのまま顔を手で覆った。また泣いている。

「本当に改心ができたんだね。観音さまも許してくださいよ」

べそをかきながら男は五目を口へかきこんだ。